

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2391500127		
法人名	株式会社 名東介護センター		
事業所名	グループホーム エム・ケア名東 2階ユニット		
所在地	愛知県名古屋市名東区高間町43		
自己評価作成日	令和4年11月1日	評価結果市町村受理日	令和5年1月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人なごみ(和)の会		
所在地	名古屋市千種区小松町五丁目2番5		
訪問調査日	令和4年11月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ感染症対策と利用者の生活の質の担保に日々、奮闘中。
 地域の保育園児との交流や毎日のように訪れる家族や知人の面会に制限がかかり3年目。感染対策には感染症専門家の指導を受け、換気や手洗い、マスク着用徹底を行い、職員たちは定期的な抗原検査とPCR検査を実施しウイルスを持ち込まないことに注意している。地域や家族との接触が遠のいてい中、当施設の大きな任務である「認知症ケア」の質を下げることなく、近所の散歩や季節を感じる行事、誕生日会を充実させる努力をしている。家族面会も認知症の方はオンラインでは会話がままならず、対面での面会ができるよう予約制にて場所や人員の確保をして面会の機会を作っている。感染対策を取りながら看取り期の見送りが家族も一緒にできている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍で感染防止対策の為に、様々な制限がかかり、どのグループホームも入居者の暮らし方が一変している中、「排泄」「食事」「入浴」「ケア」「看取り」を認知症ケアの5つの柱とし、入居者の日常に丁寧に寄り添い、「共に生活(いきる)」の理念を日々実践に繋げている取り組みが見られる。面会・外出・運営推進会議等、「コロナ禍だから中止」ではなく、行政、家族、地域との連携により代替策や、機会を見逃さず検討し実施している。職員の研修、勉強会に力を入れており、全員が理念を理解し修得が図れるよう、質の向上を目指している。また、看護・介護共に経験豊かな職員の配置があり、医療連携も整備され、家族からのホームへの信頼は厚い。今後も併設の小規模多機能と共に、地域の認知症ケアの拠点としてだけでなく、取り組みを発信することで、認知症ケアのガイドラインの役割に繋がる事が期待出来る事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに ○ 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている ○ 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが ○ 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	エム・ケア名東の理念である「共に生活(いきる)」について、施設内研修にて全ての職員に伝えており、全ての職員が把握している。	日々のケアが理念に基づいて実施されているため、折に触れ、話し合われている。また、定期の小グループ研修の中で、2カ月の間に全員が理念について再確認を行い職員の共有認識を図り、実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍前は、毎年地域の行事に参加していた。現在は利用者や散歩に出掛けた時には、すれ違う人に必ず挨拶を行ったり、近所の公園を利用する子供達に利用者が手を振ったりして交流している。	町内会に加入している。これまでは、開放日を設け、地域との交流を定期的に行ってきたが、今は、毎日の散歩時に挨拶を交わしたり公園で遊ぶ子供たちに手を振る事で交流を継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設の利用者やその家族に関わらず、随時介護・認知症ケアの経験の深い管理者・看護師を中心として介護相談を受け付けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルスの影響により運営推進会議は郵送または短時間での開催となっている。運営状況の報告を行い、アンケートで意見や要望をお聞きしている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	何かあれば市担当者に報告し、指導を受けている。	更新時、感染症への対応等、不明点があれば市の担当者に問い合わせをしている。また、市の主催の研修にオンラインで参加している。その他、事業所内でコロナ感染症が発生した場合には速やかに事故報告を届出を提出し、マニュアルに沿って対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	正面玄関の自動ドアは夜間を除いて、いつでも出入りできるようになっている。職員は施設内研修にて身体拘束について毎年学んでおり、気を付けながら日ごろのケアに取り組んでいる。また、身体拘束防止委員会で話し合われた内容について議事録を公開し、職員全員が周知している。	身体拘束は行わない。年4回身体拘束等適正化委員会を開催し、その際は研修も同時に実施している。また、玄関、職員用のトイレ、事務所に啓発ポスターを掲示し、スピーチロックを含めて身体拘束にならないよう職員全体で共有認識を図っている。また、外国人の職員には母国語で説明し、理解を深めるよう努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎年の研修で高齢者虐待について全職員が学んでいる。特にスピーチロックについてはポスターを作成し、現場に貼り出し職員同士が声掛けしながら職務にあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している利用者がある。身元引受人との関わりなどが、制度について学ぶ機会となっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、必要な時間をかけて利用者ご家族が理解できるまで十分な説明を行っている。契約後も疑問点があれば、いつでも受け付けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会やサービス担当者会議にて利用者ご家族より意見や要望をお聞きすることがあり、改善点はすぐに見直しをしている。	意見箱を設置している。コロナ禍になり家族とは電話やお便りの他、グループラインを作成し、入居者の様子を動画で伝え、また、看護職員を含めた関係スタッフとのやり取りを行い、都度、意見交換が出来る。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ禍で全体での職員会議ができなくなっている分、少人数でのカンファレンスや一対一の相談や意見を聞く機会を設けている。	全体会議の代わりに小グループの会議を開催し、職員の意見の聞き取りを行っている。また、現場では看護師やチーフが相談役となり、運営に即反映できる体制が構築されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年末年始には特別手当を支給している。また正社員は年に2回自己評価を行い、施設長と個別に面談。自己の反省や目標について話しをする機会がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	看取りケアでは、看護師や施設長から指導を受けながら学んできたチームメンバーより、その内容を現場職員に教えている。また、オンラインによる施設外研修に参加する機会がある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍に伴い理想的にはできていない。地域との連携や情報交換と言える活動は感染症拡大を懸念して控えているのが現状。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に管理者や計画作成担当者が面談を行い、世間話の中で本人の気持ちや要望を聞き取っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入にあたり家族にセンター方式家族版の記入をお願いしており、家族や本人の要望の把握に努めている。また、利用開始後も家族との情報交換はラインや電話等にて頻繁にリーダー職中心に行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約前に利用者や家族から聞き取りを行い、利用中の事業所から情報提供を得るなどして必要なサービスを見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物をたたんだり、食事の盛り付け等の家事を利用者と職員が一緒に行うことで、利用者が役割を持つことができている。また、本人の得意なことを安全に行ってもらえるように支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍でも、ご家族とこまめに連絡を取り、連携を行っている。洗濯機不可の衣類の洗濯をお願いしたり、本人の嗜好品を差し入れをしてもらうことがある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で面会制限がある時には、メッセージカードを作成しご家族に郵送している。お孫さんから定期的に手紙が届く利用者には、職員が一緒に手紙を読んで利用者と喜びを共有している。	愛知県のコロナの感染状況と行政の指導に従いながら、感染対策を講じた上で、面会できるよう、事前に面会可能予定日、面会にあたっての必要事項(日時・場所・人数・ワクチン接種の確認等)の案内を家族と身元引受人に送付している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	相性を見極め座席を決定している。また、日々の暮らしの中での利用者同士の関係性の変化を観察し、その関係が円滑であるように職員が仲を取り持ったり間に入りフォローを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者の葬儀には故人と縁のある職員が参列しており、初盆にはご挨拶をしている。また、看取りを振り返るカンファレンス行っている。亡くなった利用者の家族とはその後もお付き合いがあり、相談に乗ることがある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	計画作成担当者が、ケアプラン作成前や日常の関わりの中で必ず利用者の意向の聞き取りを行っている。センター方式のアセスメントにより、意思疎通が難しい状態にあっても本人の思いに寄り添うことができるよう努めている。	センター方式を用いてきめ細かなアセスメントを行っている。日々の入居者の発した言葉や昔話をそのままセンター方式の様式を用いた介護記録に書き込み、入居者の意向に沿ったケアに繋がるよう検討されている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族により記入されたセンター方式家族版や以前利用していた事業所の情報提供を受けることにより、利用者の生活歴の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各利用者に二名の担当職員がおり、日頃から気にかけて関わっている。その担当者が作成した詳細なアセスメントを参考に、計画作成担当者が利用者の現状を把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者の担当職員が本人の様子やできること・できないことをアセスメントしている。計画作成担当者が職員との話し合いや、ご家族の要望・意見を取り入れてケアプランを作成している。	半年に1回介護計画の見直しを行っている。その際、家族には事前に意見を聞き取り、担当職員、看護職員、チーフによる担当者会議を開催している。更新された計画を職員全体で共有するために、個別ファイルに綴じ、申し送りノートにて職員の回覧を確認している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員は日々、24時間の様子をセンター方式のシートに記録している。職員同士や計画作成担当者間で情報共有を行い、介護計画書の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居前から愛犬と生活していた利用者が2名いる。利用者と愛犬と一緒に暮らせるように、家族と連携しながら支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	散歩コースとして近隣の公園を利用している。平和公園や牧野ヶ池等へ人混みを避け、ドライブで利用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の往診を行い、必要時は24時間いつでも医師が駆けつけて診察している。他科の受診は家族の協力と職員の支援で行っている。	開設時からの担当医であり、意見交換が活発に行える関係が構築されている。入居者の主治医であり、急変時には24時間対応が可能である。訪問診療は月に2度あり、その他往診が随時可能である。また職員に看護師が3名おり、迅速な連携がとれている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	経験豊富な看護師が常駐しており、介護職員と一緒に日常ケアに参加して異常の早期発見ができています。また、介護職員が気づいた利用者の体調の変化を上席へわかりやすく報告できるように、報告カードを各階に設置している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	骨折等で入院時には病院看護師等の関係者と密に連絡を取り、情報共有に努めている。家族の希望・病院の意向により早期退院できるように支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、契約時に要望をお聞きしている。また重度化した時、再度説明し要望を確認。コロナ禍においても看取りケアを行い、感染対策を取りつつ家族も臨終に立ち会って職員と一緒に見送りをしている。	入居時に重度化した場合における対応と看取りに関する指針を説明し、同意を得ている。また、重度化した際には、密に家族と連絡をとり、入居者の現在の状態、今後どのように容態が変わっていくかを説明しているため、家族の意向や方針決定のための心理的なサポートとなっている。居室に簡易ベッドの用意が可能で、コロナ禍であっても、看取りの際の付き添い宿泊は可能である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急対応マニュアルがあり、現場職員は周知している。24時間いつでも対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年二回の避難訓練(夜間想定も含め)では、名東消防署、新日本コーポレーション(消防設備点検会社)より指導を受けている。	年2回併設事業所と合同で夜間想定を含めた避難訓練を実施している。消防設備点検業者による点検後、入居者と共に消火器の使い方の研修を行っている。自力避難が困難な人の避難方法も全員が把握している。備蓄として、水、食糧を3日分の他、カセットコンロ、毛布等を備えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	高齢者虐待、身体拘束を全職員研修で学び、スピーチロックをしないケアに努めている。職員同士、適切な声掛けが出来ているか注意しあっている。	スピーチロック、態度、言葉掛けに関しては職員間で注意しあえる環境である。入社時のオリエンテーションや年間研修計画に接遇やプライバシーについて位置付け、職員の意識向上が図られている。また、夜勤時には夜勤職員4名の中の1名が見回り隊として、各フロアを時間を決めず見回り実施することで、行動抑制やセルフコントロールの習慣づけに繋げている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	洋服を選ぶこと、散歩に出かけるタイミング等、本人の意思を尊重しながら日課を進行している。また、認知症が進んだ利用者には、はい・いいえで答えられるような質問をし自己決定の手助けを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員のペースや日課だけでケアするのではなく、可能な限り一人一人の生活ペースや本人の希望に沿ったケアを実践している。利用者の体調や気分に合わせての柔軟な対応を心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	コロナ禍で理美容の訪問が難しい時にもさっぱりとして過ごすことができるように、職員が本人の好みに合わせて毎朝髪を梳かしたりまとめたりして、おしゃれに整えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の盛り付けや配膳、後片付けを利用者と行っている。認知症により家事の一連の作業はできなくても職員が手伝いをして労いを伝えてやりがいをもてる状況を作ること意識している。	入居者の希望や体調に合わせて場所や時間を変更している。通常は業者による献立を提供しているが、季節の行事や誕生日には、ドーナツやケーキ等を入居者参加で手作りし、楽しんでいる。また、入居前に晩酌の習慣があった入居者に、月に数回ノンアルコールビールを提供し雰囲気を楽しんで頂いている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量を一人ずつ記録し、その人に合ったタイミングや好むものを把握し、それぞれに合わせたケアを行っている。看護師は飲んで出すことに重点をおいて観察している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアにて清潔保持に努めている。できるところは本人に行ってもらい、その後職員が仕上げ磨きをしている。口腔ケア時には、口腔内の観察も行っている。歯科医診察も受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	認知症が進行しても、できる限り便器で排泄できるよう、個人の排泄パターンを観察しトイレ誘導を行っている。オムツ使用に移行する場合は「排泄アセスメント」を行い、職員はオムツを簡単に使用しない気持ちでケアにあたっている。	安易にパッド・おむつを使用しない方針である。排泄のアセスメントを実施し、必要であれば訪問リハビリと共同し、リハビリを行い、失禁が多ければトイレへの誘導の声掛けを定期時行い、再アセスメントし、個々に合った排泄のタイミングを見極めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者は介護士と一緒に体操を行い、できる限り散歩やレクリエーションで動く機会をもっている。ポスター掲示し水分摂取や腹部マッサージにより便秘の予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	時間や回数を決めず、可能な限り夜間帯や連日の入浴に対応している。気が進まない時には仲の良い利用者と一緒に入浴を提案する等、安全に配慮しながら個々に合った支援を行う。	良事と同様に、時間や回数を決めずに、個々の希望により入浴できる。入浴が好きではない方に対しては声掛けの工夫やタイミングをみて再度声掛けを行い週2回は入浴出来ている。また、ホームには特殊浴があり、重度になっても入浴の希望に添えるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調や体力に合わせて居室のベッドや共有スペースのソファで休息がとれるようにしている。毛布やタオルケットも使用し清潔で季節にあった寝具を提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤師と連携し、看護師管理のもと、介護職員が服薬援助を行っている。常に様子の観察・記録を行い、変化があれば看護師に報告を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できる家事は職員見守りのもと行ってもらい、お礼や労いの言葉を伝える。空いた時間を見つけ散歩やボーリング等のレクリエーションにより気分転換をはかっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者はドライブやお散歩等の外出の支援をコロナ禍でも受けている。愛犬とともに入居した利用者もおり、他利用者と共に気候や体調を見計らって屋外の散歩を楽しんでいる	毎日の散歩や、季節の移り変わりが感じられるように、紅葉狩りや花見には車椅子使用の方も含めて全員が参加できるようグループ分けし、車で出掛けている。また、ホームのピロティを使用して、喫茶ピロティを開催し、外気に触れながらティータイムを楽しむ等コロナ禍以前と変わらない暮らしが継続できるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いとして現金を預かり、必要時に使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	ご家族へ年賀状を送ることができるように、年賀状作成のレクリエーションを行い発送している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	コロナ感染症を念頭に清掃・整頓や換気を行い、清潔を保つよう心がけている。また、室温やにおいにも気を配っている。ユニット内には利用者が季節を感じられるような、派手すぎない飾り付けを行っている。	コロナ感染対策の為、一部の常時換気と定期換気を行っている。また、食事時にはパーテーションを使用し、食事時の飛沫感染にも配慮している。施設内の飾り付けは季節を感じられるよう行事にちなんだ装飾をしているが、高齢者が馴染みある懐かしさが感じられるよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ユニットには複数人用と一人用のテーブルがあり、気の合う利用者同士で座ったり、逆に一人のほうが落ち着く利用者にも対応している。また、ソファでは、ゆったりくつろいでテレビを観ることができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者は入居時には使い慣れた家具や小物を持ち込んでいる。居室は定期的に各担当者により整えられ、リラックスして過ごすことができるよう支援している。	使い慣れた家具や仏壇、テレビ、家族の写真等個々に部屋作りがされている。入居前の自宅部屋の様子をアセスメントし、本人が安心できる環境を再現したり、入居前から飼っていた犬と一緒に入居し、寝る時は犬と一緒に部屋で寝る等、本人のこれまでの暮らし方に沿った支援を行っている。ベッド、カーテン、エアコン、洗面所は備付である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや浴室は文字だけでなくマークが掲げられており、認知症が進行した人にも視覚的に伝わるよう配慮している。		